
ライトノベルが軽いなんて誰が言った!?

Tio_Valentine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライトノベルが軽いなんて誰が言った！？

【著者名】

NZマーク

【作者名】

Tio_valentine

【あらすじ】

NEETでどうしようもないアダルトチルドレンが立ち直る物語

1話 ゆづけ 25歳 俺は一トじやない!!--ライトノベル作家になる

でやるだけ更新するよ!」
いたします。

1話 ゆうすけ 25歳 俺は一ートじゃない！――ライトノベル作家になる

ライトノベルは日本のサブカルチャーの中で生まれた小説のカテゴリーの一つ。英単語のLightとNovelを組み合わせた和製英語であるが、現在では英語圏などでも日本の小説ジャンルを指す単語として使用されている。略語としてはラノベ、ライノベ。稀にではあるが、軽文学や軽小説と表記される場合もある

プロローグ

「バゴン」と後からとてつもない音がした。小説家を目指している俺にしては本当につけたない表現だが、まさか現実にドアが蹴り飛ばされ、こっちに飛んでくるなんて思わなかつたから、こんな表現で勘弁してほしい。

振り向くと長い黒髪の女が言つ

「あんたが木崎勇輔？私に依頼した」

1・ゆうすけ 25歳 俺は一ートじゃない！――ライトノベル作家になる

俺が応募している五十鈴社のライトノベルの応募総数が、5000を超えたらしい。

くそつ、俺はもう何年も前から、やっているのに。この不景氣で希望の無い世の中で仕事や夢がなくなり、巷の当たっているライトノベルを読んで「これなら俺もできそう」と勘違いしたDQN共のせいで。

一言言おひ。俺はお前らなんかとは違う。俺はもう高校のときから構想を練り続け、大学時代からライトノベルを書き始めたのだ。一度は、ライトノベル新人賞の最終候補まで残ったことがあるんだ。だが、審査員が選んだのは、訳の分からない高校生がひたすらモテまくつて、ハーレムな高校生活を送るといういかにも萌え好きなDQNに受けそうな『LOVELOGYチャイ』とかいう訳の分からない作品だ。しまつた。訳の分からぬを

2度使つてしまつた。俺としたことが…。

最終候補に選ばれてから早5年がたつてしまい、最近では2次選考の段階で落とされてしまうザマだ。

俺は、もう25歳になる。一応、親の田もあつたりするから、仕事を続けながらライトノベルを書こうと思いつい新卒の22歳の時にZETエンターテイメントという会社に就職した。しかし、入った会社がいわゆるブラック企業つていう奴だ。研修もほぼ無く、ひたすら新しい会社に『インターネットソリューションZET-5』とかいう商品をひたすらセールスする仕事をやらされた。『冗談じゃない!!! 俺はZETがアニメ配信会社だから入ったのだ。なのになんて、ネットワークのソリューションの新規営業とかいう訳の分からぬい事をやらされなきゃならないのだ。』

しかも永遠に毎日100件も訪問しても「いらない」「もう一度とくるな」「くたばれ」など散々断られ続ける仕事だ。ほとんど、休みもなくサビ残ばかりで、俺の大切なライトノベルを書くための時間は全くなくなってしまい、

俺は、こんなつまらない仕事のためにがんばっているのではない、夢を叶えるために生きているんだと言う事に

気がつき、部長に辞表を叩きつけてやつて辞めてやつた。さすがにそのときはスカッときたもんだ。

そこから俺は、親には一応公務員になるといって猶予をもうこゝ、ひたすらライトノベルを書き続け応募する日々を送った。だが、一応親の手前公務員になるといつてあるし、俺としても公務員みたいな暇な仕事であれば俺の好きなライトノベルを書き続けることができる。いわゆる一石二鳥のアイデアだと思い、公務員試験を受け続けている。

だから一言頼む。

…………

俺はNEETじゃない!!!!

必死で努力しているんだ!!!!
いつか結果が出るはずだ!!!!

しかし、両方とも結果が出ず、2年がたつてしまった。そんな秋のことだ。

夢を見ちゃ駄目か？

久々つていうわけではないが、2週間ぶりに外に出る。同じ漫研サークルで同じZET社に入つた友人のケンジ奴が遅い夏休みで実に2年ぶりにこっちに戻つてくるといつことなので久々に飲もうということになつて待ち合わせをしているのだ。俺はあんなブラック企業を辞めてしまつたが、奴は続けているらしい。

「おう、ゆうすけ久しぶり」

振り返るとケンジがいた。どことなく痩せた感じがするが、スーツ姿がなんとなくだが、以前より様になつていてる感じだ。昔はいかにもスーツに着せられているつていう感じだが今は着こなしているし、声も昔みたいなオタ特有のしゃべり方ではなく、大きくなつきりした声だ。どうやら、ケンジは仕事の終わりにもかかわらず居酒屋の予約を既に済ましてくれていたみたいで、俺らはその店に向かつた。

「なんだよ、ゆうすけ　まだ就職していないのかよ?ぶつちやけ、1年以上ニートしているとマジやばいって。面接でつっこまれるぜ」

「いやあ、この間なんか商品の納期でトラフってマジ大変だつたよ。だけど、おかげで支店の売り上げ1位になつてさあ。相変わらず残業が多いし、休日出勤が多いけどよ、まあ支店長になれば給料上がるから我慢だわな」

「総務部の麻紀ちゃん覚えている?そつそつあのFカップの。あの子と遂にテーントできてさ。いやあ、もしかしたらモノにできるかも

しなくてしや。いや、がんばぢやおつかな

「で、ゆづみの方は最近どうなんだよ」

「どうだなんて言われても、正直言えば何もない。せっかくケンジに一方的にここの2年にあつた事をマシンガンのようになだらかに2年間という月日が長かったを感じさせられる。社会人デビューを果たし、いつの間にか仕事で成果をあげて彼女ができるようになったいる。ただ、それだけの事だ。しかし、自分にはこの2年間は何も無い。

それが事実だ。

「ゆづみ、お前まさかまだ、小説家つていつかライトノベル作家田指していののかよ?」

図星だつたため、無意識に田を逸らしてしまつ。それを察したのかケンジは言つ

「いや、俺もさあ、同じサークルにいたから良くなつかるし、俺もさあ日本の漫画会を変えてやるつて2徹、3徹して漫画大賞に応募したけど、俺らもうそんな年じゃないじゃん。現実を見ようぜ。確かに、夢を諦めるのはつらいかもしないけどよ、応募日までに間に合わせるために、漫画描いていたときの2徹や3徹していたからさ、今の会社の激務に耐えられるんだよ。そう考へると、あの努力も悪くないって思づく」

俺は走つた。

ただひたすら走つた。

ケンジはこの後実家に帰ると黙つて別れた。しかし、あの後ケンジが色々とアドバイスなんか愚痴なんか説教なんか、分からぬが色々言つていたが頭に入らなかつた。少しでも頭に入つた情報を追い出すために走る。

「夢を諦める？そんなことができるか」

「現実を見る。こんな現実に何の価値がある。現実から逃げて何が悪い。違う、俺は逃げてない。必死にがんばつてある。何を？」二年、小説も公務員の勉強もしていないじゃないか？違う。今は考えているだけだ。何を？」

本当は小説の主人公のように叫びたかったが、チキンな俺にそんな事はできなかつた。

ただ、部屋の中に猛ダッシュに駆け込み誰も入つてこないようになを閉める。とはいっても口うるさい両親はいない。今月から、父親が短期赴任のため母親と一緒に北海道に行つている。俺としては、常に小言を言う母親もいないし、ときおり妙に長く古い教訓のような説教を言つ父親がいないのは唯一の救いだ。

そのとき廊下から足音がし、部屋をノックする音が聞こえて心臓がドキッとした。

両親はしばらく帰つてこないはずだ。じゃあ、誰だ。俺には従兄弟も兄弟もないし、

アホな3文ライトノベルと違つてイタイ幼馴染なんかもいない。じやあなんだ？

「あんた、木崎勇輔よね。いるんでしょう。つてか、いるのは分かつているから、鍵開けてくれない。」

愛想は無いが、綺麗な女の声だ。もしや、あれか。依然アダルト사이트で魔がさして押してしまった4クリック詐欺の請求か？金の回収のために暴力団が押しかけてきたに決まっている。女の声だと思つてドアを開けたら暴力団男たちがズラズラと入つてくる。そうに決まって…

「ああ、メンンドクサイ。もうドア開けるからね」

その言葉が聞こえた瞬間にドアがSF映画よりもじくに飛んできた。幸い天井にドアが当たつただけだが、それでもあまりの驚愕に体が動かない。

「なんだ、やっぱいるんだじゃん。いるなら出てきてくれれば、鍵壊さなくてすんだのに。面倒ね～」

長い黒髪の女が靴を履いたままこっちに入ってきた。顔は廊下と俺の部屋の電気を消してあるため良くな見えないが、スラリとして背の高い女だつて言つことは良く分かる。

「あんた… だ
れ

「あやく俺は口に出す。

「私は五十嵐五十鈴。NON-DEMO屋だよ。あんたが、2週間前にWEBで依頼した件で来たのよ。まさか、あんた覚えてないの

？」

女は呆れたような口調で言った。
淡々と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089y/>

ライトノベルが軽いなんて誰が言った!?

2011年11月24日21時53分発行